

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	戦前の新聞に見られる梁啓超像について：『朝日新聞』、『読売新聞』を中心に
Author(s)	張, 淑君
Citation	表現技術研究 , 19 : 69 - 96
Issue Date	2024-03-31
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/55146">10.15027/55146</a>
URL	<a href="https://doi.org/10.15027/55146">https://doi.org/10.15027/55146</a>
Right	
Relation	



## 戦前の新聞に見られる梁啓超像について

—『朝日新聞』、『読売新聞』を中心に—

張 淑君

### はじめに

梁啓超は政治家や思想家や学者として国内外においては名を馳せていたのみならず、新聞記者としても近代中国に多大な影響を与えた。とくに、一八九八年十月に日本に亡命してから一九一二年十月に帰国するまで足掛け十五年間の間に、彼は日本を拠点に『清議報』『新民叢報』などを発行したり日本の雑誌に記事を登載したりする一連のジャーナリズム活動を通じて、大隈重信、陸奥、志賀重昂、徳富蘇峰などといった日本の政治家、ジャーナリストのみならず、日本の新聞メディアからも関心が寄せられており、関連する記事が大量に掲載されている。そこで、日本の新聞メディアによって梁啓超に関するどのような記事が報道されたのか、日本の新聞メディアの報道記事から窺える梁啓超の人物像は、彼自身とはどのぐらいの距離があるのかなどを解明するのは、日本における梁啓超像に関する研究の重要な一環であると考ええる。

梁啓超と日本の新聞メディアとの関わりについては、中国においては、まず王曉秋の『近代中日関係史研究』（中国社会科学出版社、一九九七年）を取り上げなければならない。その中の「戊戌

維新と日本の関係」という一節では、戊戌変法前後の日本の各新聞に掲載されている記事に基づいて、日本の言論界の戊戌変法に対する反応を考察した結果、日本の新聞は中国の戊戌変法に対して懐疑心と野心を同時に有しており、康有為・梁啓超などを代表とする維新派より張之洞らの地方実力派を重視すると述べていた<sup>1)</sup>。また、日本においては、志村寿子と斎藤泰治による研究に言及する必要がある。志村寿子の研究は「戊戌変法と日本」をテーマとし、明治期の新聞記事に基づいて、明治初年以來の日本の大陸観の推移と清国の改革運動との関わりを考察し、概説に終始しており、斎藤泰治の研究は主に新聞記事に基づいた戊戌変法と政変後の康有為の動静に絞られ、康有為、梁啓超を代表とする改革派については少し触れる程度に留まっている<sup>2)</sup>。このように、従来の先行研究は戊戌変法前後の記事だけに注目し、ほかの時期に揭示された梁啓超に関連する記事にはあまり目が向けられていない上に、梁啓超一人に絞った研究は行われていないため、今後この二点に着目して更なる研究を行う必要があると思われる。

以上の問題点を考慮し、本稿では分析対象を明治から第二次世界大戦終了までの『朝日新聞』と『読売新聞』における梁啓超に関する記事に絞る。これらの資料を選択する理由の一つは、明治

期に小新聞として登場し後に大成功を収めた新聞を取り上げて、梁啓超に対するより大衆的な認識を明らかにするためである。もう一つの理由は、いずれの新聞も、『朝日新聞』は「聞蔵Ⅱビジュアル」として、『読売新聞』は「ヨミダス歴史館」として創刊から現在までの記事がデータベースとして公開されており、関係する記事を効率的に収集することができるためである。以上を踏まえて、本稿では、これらの梁啓超関連記事を収集し整理したうえで、梁啓超個人の生涯も考慮に入れつつ、時期を分けてこれらの記事の内容に検討を加えることによって、『朝日新聞』と『読売新聞』といった新聞メディアはどのように梁啓超を報道していたか、各新聞において梁啓超の人生の境遇の変化に伴ってその報道にはどのような違いが生じたのか、日本の新聞メディアの記事からどのような梁啓超の人物像が浮かび上がるのかなどの問題について、明らかにしてみたい。

### 一、『朝日新聞』と『読売新聞』について

『朝日新聞』は、一八七九年一月二十五日に木村平八、木村勝父子二人により大阪府で創刊され、朝日新聞社により発行された全国紙であり、現在の販売部数は『読売新聞』に次ぎ日本国内第二位である。「朝日」の命名は「旭日昇天 万象惟明」に由来し、初代の主幹であった津田貞の「毎朝、早く配達され、何よりも早く人が手にするもの」という提案による。一八八八年七月十日、『東

京朝日新聞』が創刊され、その翌年一月から、大阪府で『大阪朝日新聞』が発刊した。一九一五年十月十日、『大阪朝日新聞』は初めて夕刊を発刊した。一九二二年二月二十五日、『週刊朝日』が創刊された。一九三五年、九州支社と名古屋支社が相次ぎ設立された。一九四〇年九月一日、各地の朝日新聞社はそれぞれ発刊した新聞紙の紙名を統一し、『朝日新聞』と命名した。歴史的に見れば、朝日新聞の論調はその時々時代の背景に依りて変化し、一定ではない。例えば、二〇〇九年の新聞通信調査会の調査では、『朝日新聞』は全国紙五紙の中では最も革新的論調とされており、『読売新聞』は最も保守的な論調とされている。『朝日新聞』は創刊してから明治時代にわたって大阪地域で最も著名な小新聞であった。明治十五年以降、政府と三井銀行から極秘裏に資金援助を受ける御用新聞としてその経営基盤を固めた。新聞『日本』が明治二十九年年末に全国の新聞に対して行った調査の結果によると、『朝日新聞』は進歩党系の新聞に属している<sup>3)</sup>。日露戦争前には主戦論を展開し、日露講和に反対する立場を示した。大正デモクラシー期には憲政擁護運動の一端を担った。第一次世界大戦後、軍縮を支持し、シベリア出兵に反対した。満州事変以降は対外強硬論を取るようになり、第二次世界大戦終了までは戦争賛美の論調を取った。

『読売新聞』は、一八七四年十一月二日に読売新聞社により東京で発行された新聞である。その創設者は柴田昌吉、子安峻、本野盛亨の三人で、「読売」二字は江戸時代の人々が好んで読んだ印刷物「読売瓦版」から取られた。発行所は東京都芝琴平町にあり、前身は一八七〇年に横浜で設立された英和辞典の出版を行って

た「日就社」である。創刊号はわずか二頁で、版面のサイズは『東京日日新聞』の創刊時に近いものであった。創刊時の印刷部数はわずか二〇〇部だったが、版面の調整、印刷技術の改善、発行政策の変更などにより、部数は徐々に増加した。一八七七年には東京でトップになり、その後、日本全国で発行部数の最も多い日刊紙に成長した。<sup>4)</sup>

小野秀雄の研究によれば、創刊初期の『読売新聞』は、東京で最も代表的な小新聞の一つであり、記事の内容は比較的通俗的で、政治的な話題にはわずかに触れられるだけで、その読者層は主に社会の中下層階級、文学愛好者、婦人を中心とし、「文学新聞」としてよく知られている。明治中期になると、改進黨のメンバーである高田早苗が主筆として加入することにより、政治に関する報道が徐々に増加してきた。しかし、明治末期から大正時代にかけて、『読売新聞』は依然として「文学新聞」として存在感を示し続けた。政治などの報道に関しては、日本国内では二流や三流とされる程度のものであった。第二次世界大戦中、『読売新聞』は『朝日新聞』や『毎日新聞』と共に御用新聞として、戦争を讚美する報道を行うことが多かった。<sup>5)</sup>

『梁啓超年譜長編』によると、梁啓超は早い時期に日本にかなり関心を寄せはじめ、康有為の門下に入って万木草堂で吉田松陰の『幽室文稿』を教材として勉強したという。<sup>6)</sup> のちに、黄遵憲の『日本国志』や康有為の『日本書目誌』などを通して日本への理解をいっそう深めた。同時に、彼は折々に日本の記者や政治家などと接触する機会を得た。特に、西太后のクーデターで日本に亡命して以降、

明治日本の新聞界の有名人と交際する機会に恵まれた。例えば、『国民之友』や『国民新聞』などの創立者である徳富蘇峰、日刊紙『日本』の主宰者である陸羯南、『日本人』の創立者志賀重昂および編集者である内藤湖南などがいる。<sup>7)</sup> 他方、戊戌運動を導いたり、日本亡命後に、日本を拠点に『清議報』『新民叢報』などを発行したり、帰国後、辛亥革命や護国運動や反袁運動などといった政治活動に大活躍したりしていた梁啓超は、日本の新聞や記者などの注目を浴びた。

筆者が調査したところ、この百年來日本の新聞メディアは梁啓超にかなり深い関心を払っていた。<sup>8)</sup> その中で、特に『朝日新聞』と『読売新聞』二社によって、一八九八年から一九四五年までの約五十年間において、梁啓超およびその活動などについて、数多くの記事が報じられた。今日の日本における梁啓超研究においては、彼の人生を大きく四つの時期に分けて研究を行うことが多い。<sup>9)</sup>

第一期（一八九〇～一八九八）一八九〇年の康有為に弟子入り後、一八九八年の戊戌変法まで、国内で変法維新運動に従事した時期、いわば「維新運動期」である。

第二期（一八九八～一九二二）一八九八年秋の日本亡命後、辛亥革命後一九二二年に帰国するまでの、国外で改革言論を鼓吹した時期、いわば「亡命鼓吹期」である。

第三期（一九二二～一九二〇）一九二二年秋に帰国してから、一九二〇年春にいたるまでの、大臣就任はじめ、実際政治に従事した時期、いわば「民国従政期」である。

第四期（一九二〇～一九二九）一九二〇年春から逝去までの、政界から身を引き、研究執筆・教育研究に大車輪の奮闘をした時期、いわば「文化活動期」である。

本章で取り上げた記事の時期区分は上記の分け方を参考にして、一九二九年に梁啓超が逝去してから一九四五年に第二次世界大戦が終わるまでの時期を第五期として、全部で五期に分けて新聞記事数から時系列で報道のトレンドを把握したいと思う。<sup>⑩</sup> 戊戌政変以前、梁啓超関連記事には『朝日新聞』が五本あり、『読売新聞』が一本もない。戊戌政変から一九二二年に日本から帰国するまで、梁啓超関連記事には『朝日新聞』が百七本あり、『読売新聞』が二十九本ある。梁啓超が帰国してから政界から身を引くまで、その関連記事には、『朝日新聞』が五百二十八本あり、『読売新聞』が七十七本ある。梁啓超が欧米より帰国してから逝去するまで、その関連記事には、『朝日新聞』が四十本あり、『読売新聞』が十本ある。梁啓超が逝去してから第二次世界大戦までの関連記事には、『朝日新聞』が二本あり、『読売新聞』が一本もない。以上から、『朝日新聞』と『読売新聞』は梁啓超について、戊戌政変から一九二〇年に欧遊を終えて帰国するまでの時期に大変関心を持ち大量に報道していることが分かる。

## 二、戊戌政変以前の記事から見られる梁啓超像

明治期から昭和期を通じて「日本の生める最大の新聞記者」と評され、日本の新聞界に多大な影響力を持っていた徳富蘇峰は一九二六年に梁啓超について、以下のように評価した。<sup>⑪</sup>

梁君は縦横の策士である。又た曾て革命的運動家であった。時としては、外國に於ける逃竄の浪人者たり。時としては、自國に於ける内閣の閣員たり。其の一生の變化は、浮沈出没繋がる舟に似てゐるが、然も究極するに、梁君は天成新聞記者だ。梁君にして若し他の野心を抛擲し、新聞記者として立たば、東洋唯一の大記者と言はざる迄も、その級中の或位を占むるに難からぬであらう。（中略）併し梁君は、要するに新聞記者だ。哲學家でもなければ、思想家でもない。云はば理想と、現實との境目に跨りて、一世の輿論を鼓吹するの天職を有する一人だ。

この引用文から、徳富蘇峰にとつて、梁啓超はあくまでも新聞記者であるという認識であったことが明らかである。しかし、徳富蘇峰の梁啓超に対する評価は、妥当であるか、梁啓超本人とどれぐらいの距離があるかといった疑問が頭に浮かぶ。そこで筆者は以下に戦前の『朝日新聞』と『読売新聞』における梁啓超関連する記事を踏まえて、『梁啓超年譜長編』などの資料と照らし合わ

せながら、各時期の梁啓超の社会的地位や活動などに重点を置いて考察を行うことで、日本における梁啓超のイメージを解明していきたい。この時期において、初めて梁啓超に言及して報道したのは、『朝日新聞』の一八九八年四月十四日付の記事である。<sup>12)</sup>

清國廣東の進士康有爲及び其徒梁啓超等は學識經驗兼ね備へ、彼の國に於ける開進主義の熱心者にして、支那各地方の新聞雜誌記者は多く其門下より出で、目下頻りに同志を糾合して支那の刷新策を講じつつあるが、何分にも支那四百餘州四億の民衆中幾分の文字を解する者は僅々の數に出でず、是れ畢竟漢文字字畫複雑にして容易に解得し難きが爲めにして、今日文化普ねからず國運進まざるも亦た其原因に存すれば、成る可く簡易なる文字を選んで普通字とする事肝要なり。

この記事によつて、梁啓超は康有爲の弟子であり、学識と経験を兼ね備え、開進主義を熱心に唱道して、中国各地の新聞記者を多数養成し、その師康有爲とともに門人を呼び集めて改進黨策を講じたことが分かる。その後、七月十日付の記事には、梁啓超について、下記のように報道されている。<sup>13)</sup>

清國皇帝は海外出使の人才を保舉するの上諭及び一般臣僚をして博く實學を講習せしむべきの上諭を發し人材として保舉せられたる工部主事康有爲、刑部主事張元濟、湖南鹽法道黃遵憲、江蘇候補知府譚嗣同を引見するの準備を命じ尚ほ廣東

舉人梁啓超は總理衙門に於て查看上奏すべき旨を命せり。

右の資料から、梁啓超は舉人ではあるがその師康有爲のように官職を授けられなかったものの、皇帝の命令により總理各國事務衙門で監督の仕事をしたということが分かる。その後、七月二十六日の記事には、梁啓超について、下記のように報じられている。<sup>14)</sup>

尚ほ同時に總理各國事務衙門に命じ查看せしめたる舉人梁啓超は本月三日の上諭を以て六品銜を賞給し、新設の譯書局の事務を辯理すべき命令あり。

梁啓超に七月三日の上諭で六品銜の官職を授け、新しく設置された譯書局の事務を担当させたことが読みとれる。その後、八月二十九日付の黃遵憲を紹介する記事においては、梁啓超の活動にも言及している。<sup>15)</sup>

黃氏の政見は康有爲一派の如く急進的改革には非ざるも、決して固陋頑冥自ら居るものに非ず、始めて「時務日報」を發刊せし時の如きも、黃氏の盡力其多きに居りしは、世人の牢記せる所にして、汪康年梁啓超二氏の如きは寧ろ一介の操觚者として聘致せられしに過ぎず、其専ら經營の任に膺りしものは黃氏なりしなり。

この記事は黄遵憲の事跡や活動を紹介して黄氏を高く評価するものである。この記事によると、筆者は梁啓超を含めて康有為一派の急進的な改革政策を批判していることが窺える。また、時務報の主筆を担当していた時期の梁啓超はただ一介の操觚者に過ぎないと揶揄すると同時に、黄遵憲が時務報の創刊と経営に多大な貢献を行ったことを褒め称えていることが分かる。

同年九月十九日付の記事で清国江西省城内の経済学堂校長である鄒凌翰を紹介する際、戊戌政変以前の梁啓超の活動にも言及した。<sup>66</sup>

嘗て黄公度、康年、康有為、梁啓超、吳德瀟等と共に強學會と云ふを創立したる一人にして、強學報を創刊し銳意革新を唱道したるより、在朝守舊派の爲に妨げられて解散し、更に時務報を創立したりとなり。

この記事から、鄒凌翰や汪康年、黄遵憲らとともに強學會を創立し、『強學報』を創刊し、鋭意改革を唱えたものの、守旧派の不満により強學會が解散に追い込まれたといった梁啓超の事跡も分かるようになった。

上記の戊戌政変以前の五本の記事は梁啓超本人について報道するものではなく、当時清国の政治状況やほかの人物を報道する記事の中で梁啓超のことに言及したものであることから、戊戌政変以前の梁啓超は当時の日本の記者から重要視されておらず、大した人物ではないと見られていたことが分かる。その後、梁啓超が改革に関連する活動に参加してから、はじめて清国政府だけでな

く、日本の新聞メディアの視野に入ったことも分る。

### 三、日本亡命期の記事から見られる梁啓超像

一八九八年九月二十一日、西太后に代表される守旧派が、袁世凱の新軍を抱きこんでクーデターを引き起こしたため、光緒帝から登用され、国政の改革に取り組んだ康有為・梁啓超らに代表される改革派が主導する変法自強運動が実行されてから僅か百三日間で強制的に中止されて破綻してしまった。この政変について、当時清国と深く関わっていた一衣帯水の日本政府も関心を寄せており、日本のメディアによつて大量の記事が報じられている。そこで、この変法運動の中心人物の一人として活躍していた梁啓超は日本の各新聞が先を争って報道する対象の一つとなった。それらの記事のなかで、『読売新聞』の九月二十五日付の記事では、初めて梁啓超について言及している。<sup>67</sup>

元来今回の改革たる康有為、梁啓超、汪康年の徒が張、劉、陳等の後援に頼り「開風氣」と唱道したる結果なれど革新の氣運にして依然鬱勃たらんには、幾千百千の康、梁、汪の徒と生ずるは揚々たることにして、捲土重来北京政府として改革と断行せしむるに至らしむること、猶我が王政御維新の如くなるを得るや必せりされば、強ち失望するにも及ばざるべしか。

この記事によると、清国改革の主要な人物の一人としての梁啓超、康有為、汪康年といった改革派は改革政策を唱えたとしても、清国においては革新の気運がなかなか高まらなかつた上に、北京政府の関係で改革運動は日本の明治維新のような成功を収めるのは不可能であることが読みとれる。梁啓超が改革派の一員であることについて、『朝日新聞』の九月二十八日付の新聞は明確に記している。<sup>18)</sup>

在留支那人投書して曰、伊藤侯北京に在り、梁啓超を救出し皇帝を復権せしめんと、亦改革派の徒か。

右の記事によると、梁啓超は改革派の一員であり、政変後に光緒帝を復権させようとしたことが分かる。それ以外にも、北京に漫遊中の伊藤博文が政変後に危険にさらされていた梁啓超を救つたことも分かるようになった。当時、康有為、梁啓超らを代表とする改革派一派はどのような危険に陥つたか、清国政府よりどのような処罰を受けていたかについて多くの報道が行われた。当時の各新聞メディアの記事によると、康有為は政変前の日に、すでにイギリスの船に乗って北京から逃亡したことが分かる。実は、この時期の新聞記事には、梁啓超その逮捕などの偽情報が多くに報じられている。政変後の梁啓超の逮捕についての報道は、大筋で「梁啓超は逮捕された」から「梁啓超は逮捕されておらず、どこかに隠れた」へと変化する傾向が見られる。例えば、『朝日新聞』の九月三十日付の記事には、下記のように記されている。<sup>19)</sup>

又北京に於て捕縛されたるは梁啓超始め纔かに七人に過ぎず、爾後の経過は極めて平穩無事なりと云々電文以上の如くして。

この記事から、梁啓超を始めとして改革派の七人が逮捕されたことが分かる。ここでの七人は梁啓超のちに戊戌変法のために死刑に処せられた「戊戌六君子」のことを指しているのだろうか。しかし、政変後の梁啓超の動向について、十月十日付の記事には、それ以前の記事と異なることが報じられている。<sup>20)</sup>

直に所謂匪人を逮捕するに着手せり其逮捕の表にあるものは康有為、梁啓超、譚嗣同等にして、康は是より先き上海に赴くべきの命を得たるも故ありて、未だ赴任せざりしが、此變動の事を内廷の同志より密報する者あり、形勢危急に迫れることを覺りたれば、昨朝急に天津に逃れたり、後追捕の吏到りて康を求むれども得ず、乃ち康の弟康幼博を捕へて質と爲し、又一面には張蔭桓の邸宅に隠れ居らんことを疑ひ、其邸宅を圍み遠慮會釋もなく踏み込みて家宅を搜索し、同邸より泮某（或は戴某とも云ふ）と云ふを捕へ去れり、又梁啓超も變を聞きて直に隠匿し、昨夜は某所に一夜を明かして、今朝密に天津に下りたり、一時難を他邦に避くるならん、又譚嗣同は前湖北の巡撫譚繼洵の子にして隨分膽略あり、彼は梁等に向ひて兄等は逃れて身を全うし以て再舉を謀るべし。



この記事から、梁啓超は逮捕を免れて他国に亡命したことが分かる。『梁啓超年譜長編』や林樞助の『わが七十年』や国立公文書館の文書と合わせてみると、梁啓超は日本大使館に身を隠してそこで一夜を明かし次の日に駐天津一等領事鄭永昌に連れられ天津に赴いて日本に亡命したということが明らかになった。西田長寿氏の研究によると、その際の日本の各新聞の報道にはそれぞれの傾向が見られ、『東京朝日新聞』と『読売新聞』はいずれも進歩党系の新聞であるため、『朝日新聞』は梁啓超の日本亡命について「某所」や「他邦」などの表現を使ったり『読売新聞』は康有為・梁啓超一派の日本亡命については、口を閉じて全く報道しないという態度を取った。このことから、『朝日新聞』と『読売新聞』の後ろ盾となっている進歩党の代表人物が当時秘密裏に梁啓超の渡日を助け、日本へ逃走中の梁啓超を保護する爲であった可能性も推測できるのではないだろうか。<sup>21)</sup>

当時、戊戌変法の失敗で逮捕や死刑の恐れがあった、東亜会会員である康有為や梁啓超や康広仁などに対して、東亜会は九月三十日に会員を集め、梁啓超らの身柄を保護することを議決し、十月二日に安東俊明・村井啓太郎・伊藤宏三名の総代が大隈重信を訪問し、梁啓超らの改革に志す志士たちが死刑を脱するために建言書を呈上した。『朝日新聞』の十月四日付の記事と『読売新聞』の十月三日の記事はいずれもこの件について報道している。<sup>22)</sup>

日清兩國の人々より組織せる東亞會は今回の政變に由りて會員梁啓超、康廣仁等の志士縛に就き將に慘刑に處せられんと

するより、去月三十日萬世俱樂部に於て江藤、池邊、陸、三宅等十數名の重立たる會員相集りて、梁等を救護せん事を議決し、三名の總代をして去る二日大隈伯を訪ひ、一書を呈して人道正義の爲め彼等の峻刑を軽減するの忠言を清國政府に致さん事を請はしめ、次で鳩山氏を問ひ同様の盡力を依頼したり。聞く我政府にては此騒動の始まるや否や、直に北京公使館に訓電し、林書記官をして一方は清國王大臣等を説かしめ、他方に於ては吾邦と意嚮を同じくする英米等の公使にも交渉し、滿人の残酷を抑止するに奔走しつつ、在りとの事にて伊藤侯も亦個人として忠言する所あり、遂に張蔭桓の罰をも緩和し事餘の志士等も或は萬死を脱する事を得るべしと云ふ。

『朝日新聞』の記事は『読売新聞』のものより詳しく、呈上した建言書の全文も掲載されている。上記の引用文から、政変後、日本政府は清国の王公大臣のみならず、イギリスや米國などの公使にも交渉し、また伊藤博文も個人として張蔭桓やほかの梁啓超らの志士の死刑を免ずることに力を注いだことが読みとれる。『朝日新聞』に掲載されている建言書の本文から、東亜会は梁啓超らを志士と見なし、彼らの改革を高く評価することが読みとれるだけではなく、当時日本と清国の友好関係にも関わっていることも窺える。

ここまで検討してきた記事は梁啓超に言及しているが、梁啓超本人だけに関する記事ではない。十月十日付の『朝日新聞』には、「梁啓超」というタイトルで報道された記事が初めて掲載されている。

以下この時期の詳細を確認してみたい。<sup>23)</sup>

康有為の弟子にして、昨年迄時務報の主筆たり、新政の舉行に際して擧げられて、翻譯局の總辦となりし梁啓超も亦逮捕の中に在り、上諭中に曰く『擧人梁啓超、康有為と狼狽奸をなし、著す所の文字語狂謬多し、著して一併に嚴拏懲辦せしむ』と、曷くんぞ知らん梁も早く逃れて清國政府の手の及ばざる所に潜まんとは。

この記事に見られる「康有為の弟子」「時務報の主筆」「翻譯局の總辦」「擧人梁啓超」「逮捕中」といった表現は、これ以前の記事に報道された梁啓超の社会的地位の総括と言えるだろう。そして、この記事では、当時『朝日新聞』の後ろ盾となる大隈重信らを代表とする進歩党の立場を或る程度反映して、同情の気持ちらを寄せていることが分かるのではないだろうか。また、十月二十五日付の記事は某外交家の評論を踏まえて清國改革派の人物を下記のように評価している。<sup>24)</sup>

康有為は政變前に至る迄工部章京の職を奉じ居たるが、其改革意見たる只々急激に走り秩序を顧みず、且つ死を以て王事に盡すの決心なく、政變前に先ちて同志に圖らず、獨り逃走したれば、同志間に於ても甚だ評判宜しからず。

梁啓超は康有為に比し大に秩序ある改革意見を有し、政變の當時に於ても、同志間に於て大に氏の一身を危み逃走せん事

を勸告するも、毅然として動かず、死を以て王事に勤む、皇帝の安危すら未だ判然せざるに當て、逃走する杯とは臣たるものの爲すべき事にあらずと容易に動かざりしが、某外國人等て逃走せしめたり、氏は康有為の門下生にして、歳二十有六。王照は禮部主事の職を奉じて居たるが、梁啓超と同じく秩序ある改革の意見を有し、今回の政變に際し大に見るべき處あり。

この記事によると、報道者、または外交家は梁啓超の師である康有為の改革策やその人格を批判するのに対して、梁啓超の改革の意見や改革活動が失敗した際にあたり、死を顧みず同志や皇帝を守ろうとした毅然とした態度などを評価していることが読みとれる。実は、『朝日新聞』は同日のもう一つの記事「亡命者に對する方針」では、梁啓超らの清國から日本に逃れた改革派が清國に文明の福音と利器を輸入したため進歩の良友として歓迎されるべきであると報じつつも、他方彼らの急激な改革方法を批判し、李鴻章や張之洞などのように秩序ある改革説を主張する大人物と同一視することはできないと述べており、ここから日本政府の当局者の態度が窺える。また、これらの改革者を長く日本に滞在させる気持ちがないという日本政府の計画も解明した。<sup>25)</sup> また、この記事では、それ以前の梁啓超に対して「康有為の弟子」や「改革者」などの呼称を使ったのは異なり、「亡命客」「亡命清客」「清國亡命者」「清國亡命客」「亡命の政客」「亡命の志士」といった表現が梁啓超に言及する際に使われるようになったことが分かる。<sup>26)</sup>

一八九九年七月二十日、康有為はカナダで華僑李福基、葉思らと協商した上で保救大清皇帝会（略称は保皇会）を創立し、彼自身を会長とし、梁啓超・徐勤を副会長とした。保皇会は澳門の『知新報』と横浜の『清議報』を機関紙として君主立憲制を喧伝した。それゆえに、康有為・梁啓超一派は保皇派とも呼ばれるようになった。『朝日新聞』と『読売新聞』の記事から康有為・梁啓超一派の呼称の変化が窺われる。日本に滞在した梁啓超一派に日本のメディア、特に『朝日新聞』は大きな関心を寄せている。ここでは、保皇会について『朝日新聞』の関連する記事を確認してみよう。<sup>27)</sup>

保皇会ともうすは桑港に在る革新主義の支那人の團體にして、康有為、梁啓超等の事業を援くる爲めに起りたる新團體に御座候、其會員は在桑港の支那人の半數に及び、週刊の機關新聞には文興、華記等有之候のみならず、既に十萬弗の運動費を備へ、猶義捐金募集中の由にてなかなか盛大なるものに御座は先般康有為はカナダを経て英國に渡航仕候處、今回は梁啓超も柏源と稱して、海外旅行券を得たる由にて、既に布哇まで参り居候得ば、いづれ數週日の中には桑港に來らるることと存じ候、之に就て保皇會派は目下歡迎準備に忙はしく、保守主義の連中は反對運動をやらかす杯なかなかの騒動に御座候、併し曩に康が晚香坡邊に逗留せし時は支那人の多數は箆食盡漿して、之を迎へ、忽ち莫大なる金員を醸集致し候ひしが當地は更に支那人の頭數も多く、革新派名士の渡米を望み居りしことに候得ば、梁の歡迎優待は一層盛なることなら

んと今より想像被致候。

この記事は、サンフランシスコで創立された保皇会の状況を述べ、康有為・梁啓超は華僑の中で非常に人気があり、彼らの活動のために義援金が集められて、優待を受けたことを報道している。記事の中では、「保皇会派」という呼称で康有為・梁啓超一派のことを指すことが分かる。『朝日新聞』の記事を確認したところ、梁啓超が逝去した時期の記事にも、彼は保皇党の創立者であるという紹介文が見られる。『読売新聞』は、一九一二年に保皇会の一員としての梁啓超の活動について報道している。

日本亡命期においては、梁啓超は『清議報』や『新民叢報』などの雑誌を創刊したり文章や著作を発表したりすることにも関心を寄せている。例えば、『清議報』の発刊について、『朝日新聞』には下記のような記事が掲載されている。<sup>28)</sup>

清國志士の發刊する所主として梁啓超氏の執筆に係るもの  
如し、本號には「論變法必自平滿漢之界始」「政變前記」「支  
那改革案」「佳人之奇遇」其他あり、文字風霜を挾み筆々活動  
す（横濱居留地百三十番）。

この記事は日本に亡命したばかりの梁啓超が創刊した『清議報』の第一号に掲載された彼自身によって書かれた文章や彼が翻訳した小説を紹介し、その文字の風格も説明した。その後、『読売新聞』には「梁啓超主筆「清議報」（雑誌）横浜にて発行」と『清議報』

の広告が掲載されている。<sup>30)</sup>

清国亡命の客梁啓超氏は目下我国に流寓し、頃日其抱懐する所と支那の志士仁人に訴ふるが爲、横浜に於て雑誌『清議報』なるものを発行す其、の宗旨とする所は支那の清議を維持し、国民の正気を激発し、支那人の学識を維持し、支那日本兩國の声を交通して其の情誼を聯ね、東亞の學術を發目し以て亜料を保存せんとするものにして所載の網目は支那人論說、日本及泰西人の論說、支那万国近事、支那哲学、支那小説等なり。而て舊臘其第一冊を發刊し、本月其の第二冊を出せり中に就て、戊戌政変記は彼の昨年政変の顛末を記する所、全篇総て八にて、其の第四篇は最緊最要の文字をれば、今之を訳載せることとなしぬ（因に記す清議報の發刊は毎月陰曆一、十一、二十一日の三回をりとす）

戊戌政変記（第四篇 政変前記）（後略）

この記事は、梁啓超は清国から日本に亡命した志士であること、彼の創刊の動機、雑誌の構成及び発行情報などを述べている。また、一九〇六年七月二十三日付の記事には、梁啓超が創立した『新民叢報』についての評論が報じられている。<sup>31)</sup>

近来在留清国人の数が益増加するに随つて、其手によつて發行さるる漢字の雑誌も少く無いが、多くは種々の蹉躓があつて永続しない、其中獨り横浜から出る新民叢報は流石に高く、

一頭地を放出して異彩を放ち、發刊以来既に九年になり、内容も益々進歩して、質のある記事が多い。

此雑誌は夫の梁啓超氏によつて管理され、記事の大部分は其の自ら筆を執つたもので、飲冰の署名のあるのが即ち其れださうな、梁氏は其の才気学識及び文章に於て今代の蘇東坡と稱されて居るが、法律学の造詣も餘程深く、且近来大いに支那法制史を研究されつつあると見え、近来の同誌には其結果が續々發表されるのは我輩の最も歓迎する所で、支那及び東洋の爲には勿論、世界の學術界の爲に其勞を謝せねばならぬ。言ふ迄もなく、支那法制史は世界の各法系中最も長き年代を有して居り、有益の内容をも存するに拘はらず（中略）之を要するに氏の如き、一般の学識殊に法学の知識ある支那人自身によつて支那法制史が此の如く着々研究されるのは実に世界の學術の爲に賀すべきこととして、我輩は返す返すも氏の勞を謝し益々其研究を継続されんことを祈らざるを得ぬのである。

この記事では、秋阜生（記事の筆者）は梁啓超が創刊した『新民叢報』は当時の数多くの漢字の雑誌の中で異彩を放つていて、内容も質も高い雑誌であると高く評価している。続いて、梁啓超は才識あり、文章の面で当代の蘇東坡と称されたほか、その中国法制史に関する研究は清国及び東洋、ひいては世界の學術界に貢獻をしたと梁啓超の學術研究を高く評価している。

前文に考察したとおり、当時梁啓超は改革派の一員として戊戌

変法の失敗で日本の新聞メディアから批判されたものの、彼の著述と学識については、高く評価する記事が大量に報じられている。例えば、『読売新聞』の一九〇二年三月二日の記事で梁啓超の著書『李鴻章』について下記のように報道されている。<sup>32)</sup>

「何家としての誰某」「誰某との関係」と云ふが如き、編章の製題は近年坊間に行はるる伝記類の共有物なれば新刊又新刊、同一の体裁を繰反すは決して怪むに足らざれども、何ぞ料らん支那人も亦時好を追ふて、這般の真似を為さんとは、而して真似の備を作すものは実に梁啓超の『李鴻章』是なり。

(中略) 著者の文章に於て達者なることは曾て之を開きしも、今始めて此書に因て其風格を窺ふを得たり、要するに達意の一派に属し、大山喬嶽の氣象なしと雖も、雲氣泉湧の態あり、只新奇に趨つて自国の文体を破壊するの癖あるは彼の得意とする所にして我の片腹痛き所なるが、文中日本の普通語を用ゐるの夥き、極點と云ひ、原因結果と云ひ、関係と云ひ、暗潮と云ひ、主義と云ひ、無能力と云ひ、起点と云ひ、関係と云ひ、資格と云ふ、此如き文字枚挙に暇あらず、彼れ豈に造語の才なきか必要に迫られたるが爲か、便利なるを以てか、日本ないづしたるに因るか、兎も角新派の文章家なるには相違なし、彼れ深く徳富蘇峰の李鴻章論に傾倒して、巻末に之を附載するを觀れば、同ら臭味の相合する所あるが如し、彼亦支那の徳富蘇峰なる哉。

この記事では、梁啓超は文章の面における達者であると指摘されているのみならず、彼が文章を著す際、新奇なる言葉で、新文体や大量の造語などを使用していることから、新派の文章家と評価され、清国の徳富蘇峰であると賞賛された。

以上をまとめると、第二時期の梁啓超に関しては、以下のよう  
なことが分かる。

その一、『朝日新聞』と『読売新聞』の記事は梁啓超の呼称の面で、改革派、清国亡命客、保皇会党员といった使い分けが見られる。

その二、梁啓超に代表される改革派は、地方実力派である李鴻章や張之洞らより劣っていて、その改革政策が急進的であることが戊戌変法が失敗した要因の一つであると報道する記事が多数見られる。これは当時日本の主流メディアだけではなく、改革派に対する一般市民の見方であると考えられる。ただし、彼の師である康有為に比べると、梁啓超は才識があり、政変の際、皇帝や同志のために、骨身を惜しまず働くという人格を評価する記事もしばしば見られる。

その三、梁啓超の来日後の動静や活動などにも日本の新聞メディア、特に『朝日新聞』が非常に関心を寄せていた。それと比較して、梁啓超の著述活動に関しては、『読売新聞』のほうが詳しく報道しており、梁啓超の著書の学術価値と彼が文学の方面にもたらした影響を高く評価したことが分かる。よって、明治期においては、『朝日新聞』と『読売新聞』はいずれも小新聞ではあるが、その報道記事の特徴が異なることも窺える。

#### 四、民国従政期の記事から見られる梁啓超像

十四年間の亡命生活を終えて、一九一二年十月に帰国した梁啓超は、政治の舞台で活動を始めた。初めに袁世凱のもとで司法総長、次いで幣制局総裁、のちには段祺瑞のもとで財政総長に就任した。また第一次世界大戦終了後には「会外顧問」として巴黎講和会議に赴くなど、北洋時代の政府にも加入して活躍している。しかし、大変遺憾なことに、当時の中国における複雑な国情や彼自身強い自負心などが影響し、彼は政治家としての実績に見るべきものはない。よって、この時期の彼は同時代の学者や文人からも強く批判されている。<sup>33</sup>しかし、筆者はこの度梁啓超に関する第二次世界大戦前までの記事を確認したところ、『朝日新聞』と『読売新聞』のいずれにおいても、この時期の記事数が最も多く、大體記事数の十分の七を占めていて、一九一七年の記事数はピークに達していることが分かる。しかし、従来の梁啓超に関する研究においては、彼が日本に亡命した時期の思想や記者としての活動や日本との関わりなどについて考察を行ったものが一番多い。よって、この時期の梁啓超関係記事を検討することによって、梁啓超はどのような人物であったのかを日本の新聞メディアの報道を分析しながら明らかにしたい。

##### (一) 梁啓超の行動について

まず、この時期の記事を確認してみると、梁啓超の動静や行方などに関する記事が多い。『梁啓超年譜長編』によると、梁啓超は

(一九一二年) 九月末(確実な日付は分からない。時間的に見て二十八日から二十九日だろう)、神戸から帰国の途について、十月五日に大沽に着き、八日になって天津に着いた。<sup>34</sup>例えば、一九一二年に梁啓超の帰国の日時などについて、『朝日新聞』には以下のような記事が報道されている。<sup>35</sup>

① 梁啓超の一行は一日午前神戸より来り、午後五時大信丸にて北京に向け歸途に就けり。

② 梁啓超は大信丸入港遅れし爲、七日午後上陸す。

この二つの記事によると、梁啓超は一九一二年十月一日午前に神戸から出発し、午後五時に大信丸で北京に向けて帰国の途にいたが、大信丸の入港が遅れたため、七日午後天津に上陸したことが分かる。しかし、前文の『梁啓超年譜長編』の記録と照らし合わせてみると、時間の面で少しずれがあることが分かる。ここでは、どちらの記録が正しいかどうかは兎も角、このような詳細な記事は梁啓超の一举一動をより全面的に把握し、過去の事実に迫ろうとする面において重要な意義を持つと考えられる。

この時期の梁啓超関連する記事においては、梁啓超の職務の变化や日中関係や梁啓超の政治思想などを中心とするものが多い。

##### (二) 職務の変化から見た梁啓超像

一九一二年、梁啓超は十四年間の亡命生活を終えて帰国した。帰国してから一九二〇年に完全に政界から引退するまで、彼は中央政界に足を踏み込んで、袁世凱政府や段祺瑞内閣などで要職に

就いて彼の政治思想を生かし政治理想を実現しようとしたが、結局当時の中国国内外の実情などの要因で失敗した。その間、彼が任命された政府での職務について、『朝日新聞』と『読売新聞』は漏れなく報道していた。<sup>36)</sup>

#### 新内閣顔触 二日北京特派員發

熊希齡は就任以來、所謂第一流の人物を物色し居るも、種々の情弊ありて、陸海兩部は留任し、内部外交交通の三部は總統系中の人物を採用せざる可からず、熊總理が人選しつつあるは唯教育、司法兩部と農林、工商を合併せる實業部に過ぎず。

二日までに略内定せる國務院の顔觸は

財政部	熊總理(兼)	外交部	孫寶琦
内務部	朱啓鈴	交通部	周自蔡
實業部	張謇	司法部	梁啓超
教育部	汪大燮		

にて張謇、梁啓超の二名は未だ承諾の意を表せず、教育總長は楊度を擧ぐるに至るやも、一説に依れば熊總理は内閣組織を遅延せしむるは國家に不利なりとし、就任の諾否を待たずして、斷然國會に提出するに至るべしと。

この記事から梁啓超は「人材内閣」(進歩党側は「混合内閣」と称する)と呼ばれている熊希齡内閣の一員として司法總長に挙げられるが、就任するかどうかはまだ決まっていないことが分かる。この後、梁啓超が司法總長に就任した記事や、梁啓超を含め内閣

した内閣大臣の写真が公開された記事などが次々と報じられている。その年の末頃、梁啓超は袁世凱に不満を抱いたために辭職を申請したという記事が、『読売新聞』より報じられていた。<sup>37)</sup>一九一四年二月に、彼は熊希齡總理の解任により辭職した。当時の経緯について、『朝日新聞』には、下記のように報じられている。<sup>38)</sup>

③熊希齡の總理解任は十日入京の豫定成る、段祺瑞の到着を待ち發表の筈なるが、總理を置かざる總統制實施も既定の事實なれば、總理と行動を共にすべき梁司法、張農商、汪教育の三總長が依然職に留まりつつあるは世人の注意を惹けり。

④梁司法、汪教育、張農商の三總長は熊總理と進退を共にするの決心を爲せるも、袁總統は支那の内閣は今日の狀態に於て連帶責任を言ふべきにあらず。又國家多端の際同盟辭職を爲すが如きは愛國精神を缺くものなりとて、半脅迫の口實ある迄留任するに決せり。

⑤袁總統は梁、汪に總長の辭職に對し十九日何も暫く其職に止まるべきを命ぜり。

⑥梁司法總長は總統の留任命令に拘はらず、辭意堅く十九日司法部に茶話會を開き告別の辭を述べ、日より出廳せず。

⑦梁、汪一總長辭職は二十日許可され、司法總長は章宗祥代理、教育總長は嚴修に代理を命ぜられたり

上記の五つの記事から、梁啓超・汪教育總長は袁世凱總統の留任命令に拘らず、熊希齡總理と進退を共にして十八日に袁總統に

辞職表を提出し、十九日に茶話会を開いて告別の辞を述べ、二十日に許可を得たという辞職の経緯が明らかになった。しかし、梁啓超は司法総長を辞任すると同時に、袁世凱総統から幣制局總裁に任命された。その十か月後、梁啓超は幣制局總裁の職を辞した。その理由としては、財政困難のため彼の予定の計画が実行できないということである。この点については、『朝日新聞』に関連する記事が報じられているだけでなく、『梁啓超年譜長編』からも確認できる。<sup>⑧</sup>

一九一七年七月、梁啓超は段祺瑞内閣の財務総長に就任した。『朝日新聞』は梁啓超の入閣についていくつかの記事で当時の事情を詳しく報道している。まず、一月十二日付の二つの記事を見てみたい。

#### ⑧ 梁氏政界に入らず

梁啓超氏は十日黎總理より午餐の饗應を受け、其席上にて梁氏は飽迄政局に立たざるを宣明し、教育事業に従事し、天津又は上海に理想的の大学を設立し、子弟を養成するの急務を述べ、總統總理の援助を求めたりと氏は十七日天津に赴く可しと。

#### ⑨ 梁啓超野心あり ▽財政総長承諾説

北京來電に依れば、梁啓超氏は政界に入らずと称するも、八日段總理と会見の節内閣改造の協議を為し、梁氏自ら財政總長たるを承諾し、許世英内務、蔡元培教育、王大燮交通、范源濂農商と決定し陸海軍、國務總理は其儘司法は未定なりと

尚何等決定を見ず。

記事⑧から、梁啓超は政界に進出せず、教育事業や弟子の養成に力を尽くしたいと表明したことがわかる。しかし、記事⑨では、八日彼は段祺瑞總理と会見する際、自ら財政総長に就任すると承諾したことが読みとれる。記事⑧と合わせてみると、記事⑨のタイトル「梁啓超野心あり」という表現を用いて、この記事の筆者は梁啓超の言行が前後不一致であることを皮肉っていることが分かる。実は、その後、梁啓超の財政総長の就任について、『朝日新聞』には詳しい報道が行われている。では、七月九日付の「段内閣の役割」という記事を確認してみよう。

段祺瑞氏は馮副總統に対し至急政府を組織すべく電請せるに、馮副總統より段氏に対し責任内閣組織方を返電し來れる由、依つて段氏は時節柄臨機の方法として臨時政府を作り國務院辦法所の看板を掲ぐるに至りたるが、其役割の外間に傳ふる所左の如し。

國務總理兼陸軍部	段祺瑞	司法	梁啓超	教育	湯化龍
	參謀總長	張敬堯			
交通	葉公綽	財政	李思浩	農商	呂調元
海軍					
湯鄉銘	外交	陸徵祥			

この記事によると、梁啓超は段祺瑞が新たに組織した内閣の司法関係の要職に就く可能性があることが分かる。しかし、十一日



付の記事「段内閣の顔觸」には、梁啓超については、下記のように報じられている。

内閣顔觸左の如し

外交 汪大燮 財政 梁啓超 内務 湯化龍 交通

曹汝霖 教育 范源濂

農商 張國淦 陸軍 段祺瑞（一説には王士珍）

司法海軍不明なり、馮國璋に打電して承認あり次第発表さるべし。

この記事から、前回の記事と異なつて、梁啓超は財政関係の仕事に就任したことが分かる。しかし、十六日付の記事「段内閣組織行惱 梁財政総長反対多し」では、梁啓超が財政総長に就任することに対しては、強い反対の声があつたことが報道されている。

段内閣の國務員の顔觸れは別項の如く内定せるが（中略）梁啓超の財政総長は反対多く、梁氏最眞の者すら軍人派の政治は各省の統一困難にして、従つて財政も容易の事にあらず、入閣して失敗せんより寧ろ野にありて大局を補翼するに若かずとし、又梁氏は財政に於て政見なく、段總理兼任するか或は田文烈を任用すべしとの説も生じ、是に依つて進歩黨派の梁啓超及湯化龍は之を段總理に申出で、段氏は尚梁氏を擧げんとし、昨今多少行き悩みの姿なり爲に、未だ國務員の発表を見るに至らずと。

この記事から、梁啓超が財政総長に就任することについて、財政は容易なことではないことなどのために梁啓超は就任するよりもむしろ在野の一人として大局を補翼したほうがいいという指摘があり、加えて、梁啓超は財政の面では、政見もないと考えていたことが分かる。その後、七月十七日の記事により、段祺瑞の招聘に対して、梁啓超は入閣を辞退したことが分かる。その後、十八日の記事はなぜ梁啓超は入閣の承諾をしなかつたという理由を報道している。

梁啓超が未だ入閣を肯ざざるは梁氏が其進歩黨内に起り居る内訌の爲め、梁氏自身の入閣希望を阻止され居る爲にして、党内には目下混合内閣不可を主張し居るもの、段内閣外に立つて南北調停の行動を執るべく主張する者段内閣の短命を見越し、梁氏自ら總理たるの時機到来迄入閣す可らずと主張する者等ありて、党議纏まらず内閣成立遅延し、段祺瑞は今尚手古摺り居れり。

この記事から、梁啓超が入閣の承諾をしなかつた理由は進歩党内では彼の入閣について様々な意見が交わされ、内訌が起きたからであることが読みとれる。また、梁啓超がなかなか就任の承諾をしなかつたことにより、段祺瑞内閣成立の遅延をもたらしたことが分かる。

その後、十九日付の記事「梁氏入閣を諾す」という記事は梁啓

超が就任を決めて承諾した経緯を詳細に報道している。ここで、その最も重要な理由を確認してみよう。

次に内閣組織は十六日夜入京後直に段總理を自宅に訪問会談せる結果、元々入閣は好ましからずと再三事態せる次第なるが、段氏の懇望辭み難く唯夫れのみの中に内閣成立を阻止すべきにあらずと信じ、入閣を承諾せり。

この記事によると、梁啓超が最後的に入閣したのは、自分が就任しないと、段祺瑞内閣の成立を阻止することになるからであった。これで、梁啓超が財政総長に就任した経緯がようやく明らかになった。

### (二) 梁啓超の言論に関する記事から見た梁啓超像

一九一五年一月十八日に、日本は袁世凱政府に対して満蒙における日本の権益問題や在華日本人の条約上の法益保護問題をめぐる二十一カ条の要求を提出した。日本の要求書を受け取った袁世凱は即答せず、在野の梁啓超を召してその意見を徴した。その後、梁啓超は「日支交渉を論ず」「日支關係に関する吾意見」「中国の地位同様と外交当局の責任」「再び外交当局に警告す」と題する文章をガゼットに掲げて日中兩國の關係や時局などに対する意見を發表した。例えば、一九一五年二月五日に『朝日新聞』は梁啓超について下記のように報道している。<sup>40)</sup>

梁啓超は北京ガゼットに「日支關係に関する吾意見」と題す

る論文を掲げ、日本に對し支那を以て第二の朝鮮と見做すの誤りなる事を述べ、支那は如何なる外國にも頼る事なく、支那は支那人に屬する者なりと主張し、大局の上よりは勿論東亞の平和維持の爲めにも支那と日本との交情を厚くするは最も必要なりと論ぜり（後略）

この記事によると、梁啓超は日中關係に對して、日本は中国に屬しているため、他國に頼るべきではないと主張し、東アジアの平和を維持するために、日中兩國の友好關係を築く必要があるという論点を表明した。しかし、日本の新聞メディアは梁啓超の一連の言論は、わざと事実をまげて発言したものであると見なし、タイトルで「誣言」という言葉を使って梁啓超の言論を揶揄している。その後、二月七日の記事では、梁啓超の言論については、以下のように報道している。<sup>41)</sup>

梁啓超氏は更に五日のガゼット紙上に日支交渉を論じて曰く、日本は支那を併呑せんとし、其名なきに苦しみ、先づ今回の要求を爲し、其容れられざるに及んで、最後の手段に出でんとするか、或は樽俎の間に欲する所を遂げんとするにあるか、若し目的前者にありとせば、日本は果して支那を併呑し得んも、其併呑が日本に利益なるやは考慮を要す、目的後者にありとせば、先づ支那の國家存在を前提として、政府の威信を落さず、國內の秩序を維持せしめんことを要すとて、最後に

天下の事常に意想の外に出づとて、白耳義の獨逸に對戦せる例を引き支那亦無意義に屈する者にあらざるの意を仄かせり。

この記事は、二十一か条にまつわる当時の日中兩國の交渉に対する梁啓超の見解を報道している。梁啓超に対して、『朝日新聞』は「妄言」という言葉でその言論を批判している。つまり、当時の日本の新聞メディアから、梁啓超は根拠もなく出まかせの言葉を發表したと受け取られたことが分かる。二月十日付の記事「第三次会見」では、八日に日置公使と陸宗輿総長との会見の模様やその成果が報じられていて、その中で梁啓超や当時の中国の新聞の記事についても言及している。

目下支那新聞は切りに強硬論を唱へ梁啓超も亦北京ガゼットに於て日本に領土侵略の意思あるものの如く讒誣を試みつつあるが、何れも皆支那政府の指揮を受け帝國の提出條件を輕減せんとするか、又は交渉を遷延せしめ列強の干渉を待たんと計るものにあらずんば、獨逸に買取せられ帝國の外交を妨害せんと試むるものにして、其手段幼稚にして陳腐なる笑ふに堪へたりと謂ふべし（後略）

この記事では、二十一か条に対して梁啓超の日本は中国の領土を侵略するなどといった見方は、根拠のないことを言い立てて日本帝國を誹っていると指摘している。また、梁啓超の言論は中国政府からの指揮をうけたためであり、その目的は日本が提出した

二十一か条の要求する内容を輕減し、日中兩國の交渉を長引かせて列強からの干渉を求めることにあると批判している。最後に、梁啓超や中国の新聞のこのようなやり方は幼稚であり、陳腐であると揶揄している。

そのほか、三月二十四日付の記事で梁啓超のガゼットに掲載されている「中国の地位動揺と外交当局の責任」という文章を「危言」と批判したり、同月二十五日付の記事「日支交渉問題」で梁啓超の「再び外交当局に警告す」という社論を「妄論」と批評したりしていることが見られる。

以上から、この時期における梁啓超関連の記事は、梁啓超の動靜や職務の変化や言論などに大きな関心を寄せて、詳しく報道している。また、この時期の梁啓超の言動に対しては、批判して低く評価していることがよく分かるが、それは従来の研究で指摘されたように、梁啓超は政權担当者として実績が特に見るものはないという理由からではなく、当時の政權担当者としての梁啓超が中国の国益を最も重視していることは、日本の国益を最大限に実現することを目標とする日本政府や日本政府の代弁者と言える日本の新聞メディアの立場とは矛盾しているに関わっていると考えられる。

## 五、文化活動期の記事から見られる梁啓超像

『梁啓超年譜長編』によると、一九二〇年欧米遊歴を終って帰国

の途につき、三月五日、上海に到着した。帰国した年の夏、梁啓超は国家の問題と個人の事業に関して旧來の方針と態度を全面的に改めた。これ以後、政治活動の上奏をまったく放棄し、国民の実質的基礎を育成する教育事業に全力で従事することになった。この年に着手した事業には、中国公学の引き継ぎ、共学社の設立、講学社の発起、雑誌『改造』の刷新、中比貿易公司の発足、及び国民動議制憲會議などがある。その後、南開大学などで講義したり清華学校国学研究院で「四大導師」の一人として学術研究や教育活動に集中している。

この時期の梁啓超に関しては、日中両国の研究者には彼の教育活動や著述活動には関心を寄せている。例えば、狭間直樹氏には、「梁啓超は基本的に文化面で活動した。『清代学術概論』をはじめ、学術的な著作の多くをこの時期に執筆し、清華研究院の教授にもなった。図書館の設立、図書分類法の確立といった文化的活動も多彩をきわめる。とはいえ、政治向きの発言は圧さえされるものではなく、基本的に自由主義的な立場から共産主義、国民革命に反対する見解を表明しつづけた。」といった指摘があり、李喜所氏は、梁啓超はその最晩年の十年間において、文化に対する主張は大きな変化が生じ、彼はそれ以前の西洋文化を導入して勉強することによって中国を全面的に改造するという主張から、西洋文化と東洋文化を融合し、東西文化の間に第三種の文明を作り上げることによって、中国の問題を解決するといった主張へ変化化したという見方を持っている。<sup>43</sup> 以上から、従来の研究においては、この時期の梁啓超に対して、主に彼の教育活動や思想の変化や学術研

究などが中心にして研究が行われており、彼の学者としての一面が明らかになったことが分かる。

それでは、この時期の『朝日新聞』と『読売新聞』の記事では、梁啓超はどのように報道されているのか。以下具体的な記事を取り上げてこの時期の新聞メディアにおける梁啓超像を確認してみよう。<sup>44</sup>

「七日上海特電」一昨日歐洲より歸國せる梁啓超氏は語りて曰く、『余は歸國するや日本との山東問題直接交渉の聲を聞き、驚異に堪へず、曩に對獨講和条約調印を拒絶したれば、當然直接交渉に賛成する能はず、余は巴里に在る時不調印に盡力し、且條件附調印説にも反對せり、今にして直接交渉を為せば、前後矛盾し自ら信用を失ひ国際人格を墜とし、今後他國に對し正義の要求を爲す能はざるなり、同問題を國際聯盟に提出せば、必ず英佛の感情を害ふべしと云ふ者あるも、此説は一笑にも値ひせず、講和會議と聯盟とは全然別物なり、講和會議は各國を代表し、聯盟は國際の共同機關なり、講和會議は小議會聯合會の如く、聯盟は參議院の如し、同じく小議會より選出すると雖も、性質同じからず、聯盟は超然たる一機關にて、一二國の感情を以て本意とする能はず、且之れを聯盟に訴ふると講和會議を脱退するとは等しからざる也、故に英佛の感情を害ふやも計り難き聯盟に訴へて勝利を得るや否や知るべからずと雖も、此問題を以て全世界の注意を喚けべば、將來必ず好影響あり、天下の惡事は必ず祕密と伴ふ一國

の政治は全國人に公開し、一國の外交は全世界に公開せば、諸弊漸時消滅すべし』。

『梁啓超年譜長編』を確認すると、『読売新聞』のこの記事は梁啓超は欧米から上海到着の際、某氏に対して山東外交問題に関して発表した談話である。<sup>(45)</sup>この記事から、梁啓超は山東問題について当時直接日本と交渉する事を求める世論の聲に驚き、政府が日本と直接交渉するということは、中国の国際人格を失い、国家利益に損害を与えるため強く反対するという立場をとったことが分かる。実は、『読売新聞』はこの記事以外に、五本の記事を掲載しており、この時期の梁啓超関連記事数（総記事数は十二本である）の約二分の一を占めている。<sup>(46)</sup>また、この時期の梁啓超は現実の方面（とりわけ政治方面）とは一切絶縁し研究に勤しもうとする一方、中国の政治問題や外交問題にも関心を寄せて、国家利益や国家の将来を一生懸命に守ろうとする姿勢が窺える。しかし、当時の日本の新聞メディアは梁啓超及び彼の主張についてどのように報道しているのだろうか。では、次の記事を検討してみたい。<sup>(47)</sup>

支那側の山東直接交渉に対する態度は最近まで余程良好となり来りたるやに観測せられたるが、其形勢は最近米国上院に於ける山東条項に関する留保案の可決により、著しく悪化したるやの感なき能はず、加ふるに近く巴里より帰京したる梁啓超、梁士詒、林長民氏等の一派が此機会を捕へ、最近熾に山東直接交渉反対の氣勢を揚げたるを以て形勢は漸次倍々悪

化せん、一方に傾ける如し、勿論前記三氏の如きは所謂政治的策士に過ぎずして何等実力の之に伴はざるものと云ふも、敢て過言にあらず、然り乍ら彼等三氏は現下熾に動揺しつつある北京政府の危機に乗じ、多少とも其人氣を恢復せんと策しつつあるは日支両国の国交上頗る遺憾なりとせざるべからず、米国の条約批准はウイルソン氏態度の爲め殆ど絶望となれる、今日支那側が飽くまでも之に頼らんとするは誠に以て愚の骨頂とも云ふべく、殊に福州事件の交渉が最近開始せられんとするに際し、山東交渉の形勢復た之に相関する事の大なるものありと思はざる可からず、而も北京に於ける安福派と靳内閣の暗闘、南方に於ける雲南派と廣東派の繋争及び南北の不一致は山東交渉に対する多大なる障碍と云ふべし、日本政府としては支那に於ける朝野の人士が一日も早く改め日本と親善關係を結ばんこと一日早ければ一日の利益あらん事を希望せざるを得ず。

この記事によれば、梁啓超、梁士詒、林長民氏等の一派が中国の国益を守るために山東問題に対して直接交渉に大反対するということを、この一派が北京政府の危機に乗じて自分たちの人氣を回復しようとする下品な行動と見なし、梁啓超等は何等の實力を持つていない策士に過ぎないと皮肉り、日中両国の国交に不利益をもたらすと強く批判するという記者の見方が読みとれる。記事の最後に示された願いがかなえられたら、元々日本の山東省における既存の利益を確保することであるものの、中国にとつては損

害を被ることになる。ゆえに、当時『読売新聞』はある程度政府の御用新聞のような役割を果し、代弁者のような存在であったと言えるのだろう。『朝日新聞』を確認したところ、梁啓超の山東問題に対する意見を報道している記事は九本あり、この時期の梁啓超関連記事数のほぼ四分の一を占めている。記事のなかでは梁啓超の山東問題に関する談話や文章を引用することで、日本との直接交渉に反対する立場が示されている。それによって、中国で二十一カ条の廃止、青島の無条件返還、日本と締結した一切の条約及び契約の取消を要求する活動が盛んになり、当時の日本政府にとって不利益なことであるため、「巴里会議以来久しく政界の表面を去り著述を事とせる梁啓超氏」といった表現で梁啓超のことを皮肉っている記事も多く見られる。

また、この時期の記事では、対支文化事業を報道する際に、度々梁啓超に言及している。例えば、『朝日新聞』も『読売新聞』も梁啓超が日本大使館で芳澤謙吉公使主催の行事に出席したことを報じている。

芳澤公使は昨夜梁啓超氏以下文化事業に関係ある人々を招待し、先づ芳澤公使から文化事業に就き支那側の注文は出来るだけ容れたいが、其全部を容れる事は困難だと述べ、梁啓超氏之に答へ、此事業に是非支那古来の哲学科學の研究と各方面の文学音楽に関するものを集めたいとの希望を述べて、深更迄主客歡談した。<sup>18)</sup>

北京では有力者の意見を聴取する爲に、梁啓超、林長民氏等

三十名ばかりを公使官邸に招待して、彼我意見の交換をやつたが、梁啓超氏の如き三四十分に互る演説を試み、十一時半になつて漸く散会したやうな盛會であつた。<sup>19)</sup>

この二つの記事から、当時梁啓超は北京での有力者と見なされ芳澤謙吉公使の招待を受け日本大使館で行つた日中文化事業についての活動に参加し、演説を通じて彼なりの意見を發表したことが分かる。『梁啓超全集』を確認したところ、一九二三年八月四日の「在日使館之演説」という文章がこの記事に言及されている梁啓超の演説の内容である。この演説で、梁啓超は日中文化事業について、「思想部」「文献部」「自然科学部」という三つの方面から進めるべきであると指摘している。ゆえに、梁啓超は在野であっても、中国で影響力を持つていたことが窺える。

學術の面では、一九二二年十月二十八日付の『朝日新聞』には、渡辺秀方による日本語の訳本『清代學術概論』の書評が掲載されている。

本書は支那の文芸復興時代たりし、清朝二百年間の學術思想の変遷を詳叙せる、梁先生の所謂従前二千餘年の學術を取り倒捲繰演せしものにして、日本は勿論支那にも此好著あるを見ずと云ふ、欧米の如く単に損益利害の上に行動し得ると異り、直に存亡死活の上に立脚する日本帝國の所謂識者は徒らに支那を骨重視して、屢々外交上の難局に逢着し、幾多の事態を将来す、生きたる支那を理解せんとする政治家學者教育

家は勿論一般人士の購讀を要す。

この記事から梁啓超の『清代學術概論』は高く評価されていることが分かる。それ以外に、梁啓超の學術研究や學術論著を報道する記事は一本もない。

この時期は梁啓超が政界から遠ざかり、執筆活動や教育研究に尽力して数多くの學術論著が発表された時期であるが、『朝日新聞』と『読売新聞』は彼の學術論著や教育活動に関してあまり報道を行っていない。一方、梁啓超の山東問題や太平洋會議や彼を代表とする研究系に関する活動には注目し詳しく報道したことが分かる。以上から、この時期の『朝日新聞』と『読売新聞』の関連する記事からみると、梁啓超のイメージは学者というよりも在野の政治家であったことが分かる。ただし、この時期に在野であった教育や著述に専念しているだけではなく、中国の国事に關心を寄せ国益のために奔走する梁啓超の活動は、当時の日本の国益に損害を与えるため、自派の勢力を回復させようとする日和見主義者のような存在であると報じられている。

### おわりに

本稿では、明治から戦前までの記事を収集して整理した上で、各時期の記事に検討を加え、各時期における記事の中に報じられている梁啓超の社会的地位の変化や主な活動などの問題を考察することによって、梁啓超に関して、日本の新聞メディアがどのよ

うに報道していたのか、如何なる梁啓超像を作り上げたのかなどを明らかにした。

戊戌政変以前の梁啓超については、『朝日新聞』には記事が五本ある一方、『読売新聞』には記事は一本も見られない。『朝日新聞』の報道記事では、梁啓超を主に扱った記事は一本もなく、ほかの記事の中で少し梁啓超のことに言及することに留まっている。それらの記事から、康有為の弟子に過ぎない梁啓超は戊戌変法以前に革新を唱道するために『強学報』を創刊したり、『時務報』の主筆を担当したりしたが、戊戌政変の時期には、その師である康有為のちの「戊戌六君子」が皇帝から高官にさづけられたのと異なり新設の訳書局の事務を担当していたにすぎない。そこから、この時期の日本メディアの記事から見ると、戊戌政変以前の梁啓超は著名であったとは言えず、特に注目されていた人物ではないことが分かる。

戊戌政変から一九一二年梁啓超が帰国するまでの時期において、『時事新聞』などが梁啓超の亡命経緯を詳細に報道したことは異なっており、当時進歩党系の新聞紙に属している『朝日新聞』と『読売新聞』は一貫して口を閉じて関連する記事が極めて少ない。そして、その来日後の動静や活動などについて、日本の新聞メディア、特に『朝日新聞』が非常に関心を寄せていた。それに対して、『読売新聞』は日本滞在期の著作活動を比較的詳しく報道しており、彼の文学の方面にもたらした影響を高く評価した。また、この時期の記事では梁啓超に言及する際、彼に対する呼称は、支那改革党の領袖（改革派）から清国亡命客（或いは志士）、保皇党党员へ

と変化が見られる。そして、この段階においては、梁啓超の急進的な改革策を批判する一方、彼の優れた才能や人格を評価するのが一般的である。

日本から帰国してから一九二〇年三月に欧米遊歴から帰国するまでの時期において、『朝日新聞』と『読売新聞』における梁啓超関連記事は他の時期と比較すると、最も多く、特に一九一七年には関連する記事数は頂点に達した。この時期の梁啓超は日本の新聞メディアから評価は低いことが分かる。これは梁啓超が政治家としての実績が優れているかどうかに関係なく、梁啓超の言論や政治活動が当時中国の国益を守っていたことは、当時の日本にとって不利益になったことに関わっていると思われる。

一九二〇年三月に欧米遊歴から帰国して以来、梁啓超は著述や教育活動に取り組んでいたものの、日本の新聞メディアは梁啓超の文化活動についてはあまり報道していない。他方、彼の山東問題に対する意見や時局に対する見方に対する報道はよく見られるものの、彼に対する評価は低い。その後、梁啓超が逝去してから第二次世界大戦が終わるまで、『朝日新聞』には梁啓超に言及する記事は二本しかないが、『読売新聞』に至っては関連する記事は一本もない。これは、彼が逝去した後、日中両国の国益と時勢に与える影響もなくなつて、『朝日新聞』と『読売新聞』から注意を払う意味もなくなつたからではないだろうか。

以上から、日本の新聞メディアは梁啓超に対して、彼の亡命以前と亡命期の動静や彼が導いた戊戌変法に関しては報道を行い、彼の人格と才能を評価しているものの、改革策や後の新聞活動は

あまり評価していないことが分かる。彼が帰国してから、特に民国従政期において政権担当者として当時日中両国の間の重要な政治事件に関わっているから、『朝日新聞』と『読売新聞』において大量の報道が行われているが、政治立場の関係で彼の活動はあまり評価されていない<sup>50</sup>。他方では、『朝日新聞』と『読売新聞』というような主要新聞メディアの梁啓超に対する評価は、その時代の日本国民の梁啓超に対する一般的な見方を代表しているのではないだろうか。

## 注

- (1) 王曉秋「戊戌維新与日本の關係」(『近代中日關係史研究』中国社会科学出版社、一九九七年)を参照。
- (2) 志村寿子「戊戌変法と日本―日清戦争後の新聞を中心として」(『東京都立大学法学会雑誌』巻六、一九六六年、七七―一一四頁)、斎藤泰治「大隈重信と東京での康有為」(『教養諸学研究』巻一二六、二〇〇九年、四七―七八頁)を参照。
- (3) 西田長寿『明治時代の新聞と雑誌』、至文堂、一九六一年を参照。
- (4) 読売新聞社社史編纂室編『読売新聞八十年史』、読売新聞社、一九五五年を参照。
- (5) 小野秀雄『日本新聞発達史』、大阪毎日新聞社、一九二二年を参照。
- (6) 丁文江・趙豊田『梁啓超年譜長編』(上海人民出版社、



一九八三年)、一六二頁を参照。

(7) 陳立新『梁啓超とジャーナリズム』(芙蓉書房出版社、二〇〇九年)、九八―一〇八頁を参照。

(8) 筆者の現時点での調査の結果の限りでは、梁啓超については、日本明治期においては報道を行ったことがある新聞は主に以下のようになる。『朝日新聞』、『読売新聞』、『毎日新聞』、『時事新聞』、『日本』、『都新聞』、『万朝報』、『中央新聞』、『報知新聞』、『国民新聞』、『中外商業新聞』などである。

(9) 狭間直樹編『共同研究 梁啓超 西洋近代思想受容と明治日本』、みすず書房、一九九九年、四頁を参照。

(10) 本章で取り上げた梁啓超についての記事は、それぞれ広島大学図書館の「ヨミダス歴史館(読売新聞オンラインサービス)」と「聞蔵Ⅱビジュアル」朝日新聞記事データベース(きくぞう)という二つのデータベースによって検索した上で集めたものによる。

(11) 徳富蘇峰「梁啓超君の清代學術概論」(『野史亭独語』、民友社、一九二六年、一六八―一八四頁)を参照。

(12) 『朝日新聞』の一九八八年四月十四日付の記事「いろはを以て支那の普通文字とせん」を参照。

(13) 『朝日新聞』の一九八八年七月十日付の記事「清廷の人材奨励」を参照。

(14) 『朝日新聞』の一九八八年七月二十六日付の記事「支那の人材登用」を参照。

(15) 『朝日新聞』の一九八八年八月二十九日付の記事「星使黄遵憲」を参照。

(16) 『朝日新聞』の一九八八年九月十九日付の記事「鄒凌翰氏」を参照。

(17) 『読売新聞』の一九八八年九月二十五日付の記事「清国の大政変 益日英同盟の利を思う」を参照。

(18) 『朝日新聞』の一九八八年九月二十八日付の記事「黄塵録」を参照。

(19) 『朝日新聞』の一九八八年九月三十日付の記事「伊藤候北京出發と清帝御近況」を参照。

(20) 『朝日新聞』の一九八八年十月十日付の記事「北京の一代政變」を参照。

(21) 前掲注(3)書、「明治三〇年代の主要新聞」を参照。

(22) 『朝日新聞』の十月四日付の記事「清國政變と東亞會」と『読売新聞』の十月三日の記事「清國政變と東亞會の建言東亞會が清國政變で捕縛された会員救護を議決 大隈首相に建言」を参照する。

(23) 『朝日新聞』の十月十五日付の記事「政變彙報(承前) 梁啓超」を参照。

(24) 『朝日新聞』の一九八八年十月二十五日付の記事「清國改革派人物評 某外交家は左の如き評を試みたり」を参照。

(25) 『朝日新聞』の一九八八年十月二十五日付の記事「亡命者に對する方針」を参照。また、一九八九年一月九日付の記事「上

海近信 放浪生」は梁啓超・康有為一派の改革の意義を肯定し、革新の順序を高く評価したものの、革新方法が不明量で秩序がないことを批判し、梁啓超が新聞や雑誌で掲載した文章に現われた無責任さや、無鉄砲さを戒めた。そのほか、『読売新聞』の一九〇八年十一月十四日付の記事では、「過激改進黨論者」や「急進改革黨」などといった表現で康有為・梁啓超一派のことを報道していることから見ると、当時の日本の新聞メディアの康有為・梁啓超一派に対する評価が窺える。

- (26) 『朝日新聞』の一九〇九年一月九日付の記事、同年十二月二十一日付の記事、一九〇〇年二月六日付の記事、一九〇一年六月六日付の記事、一九〇二年四月三日付の記事、同年五月八日の記事、一九〇三年五月二十三日の記事、一九一一年七月十五日付の記事、『読売新聞』の一九〇九年六月二十七日付と七月十七日付の記事では、梁啓超に言及する際、よく似ている表現が使われていることが見られる。

(27) 『朝日新聞』の一九〇〇年二月七日付の記事「保皇會」を参照。

(28) 『朝日新聞』の一九二九年一月二十日付の記事「梁啓超氏 逝く」を参照。

(29) 『朝日新聞』の一九〇九年一月三日付の記事「清議報（一號）」を参照。

(30) 『読売新聞』の一九〇九年一月六日付の記事「梁啓超主筆 清議報（雑誌）横浜にて発行」を参照。そのほか、一月十三日付の『読売新聞』には『清議報』の広告が載せられている。

(31) 『読売新聞』の一九〇六年七月二十三日付の記事「清国成文法の淵源」を参照。

(32) 『読売新聞』の一九〇二年三月二日付の記事「梁啓超の『李鴻章』を読む」を参照。

(33) 例えば、中国においては、繆鳳林は「悼梁卓如先生（1873-1929）」（夏曉虹編『追憶梁啓超』、生活・讀書・新知三聯書店、二〇〇九年、九八-一〇二頁）という文章でこの時期の梁啓超に対して、「梁氏一生活動亦可分為此四期…（中略）壬子返国而從事於政治（中略）第三期之從政最失敗（中略）一代天才、政治上遂無若何成就。」と評しており、素痴は「近代中国學術史上之梁任公先生」（同書八八頁）という文章でこの時期は梁啓超にとって「実為先生一生最不幸之時期」と評しており、惠隱は「梁啓超任北洋財政總長時二三事」（同書、二二-二三四頁）という文章で段祺瑞内閣の財政總長を担当している時期の梁啓超に「不料到任多時、一籌莫展。（中略）登台以来、毫無成績可言。（中略）任公当財長、任内未能興一利、革一弊。」と批判している。日本においては、狭間直樹氏は前掲注（9）書の「序文」で「溢れるばかりの自負とは裏腹に、政權担当者としての実績に見るべきものはない。」と評している。

(34) 前掲注（6）書、六五〇頁を参照。

(35) 『朝日新聞』の一九二二年十月三日付の記事「梁啓超帰國」と十月九日付の記事「梁啓超入津」を参照。

- (36) 『朝日新聞』の一九一三年九月三日付の記事「新内閣顔触」を参照。
- (37) 『読売新聞』の一九一三年十一月一日付の記事「梁辭表呈出」に「梁司法総長は袁世凱氏の専制に不平を抱き単独に辭表を提出せり、但し当分許可無からん」とある。
- (38) 『朝日新聞』の一九一四年二月十二日付の記事「熊総理解任發表」、十四日付の記事「袁總統の脅迫的引留」、二月二十一日付の「梁汪辭職引留(同上)」、「梁啓超留らず」、「梁汪二総長後任」を参照。また、『読売新聞』の一九一四年二月二十二日付の記事「兩總長任免」も梁啓超が司法総長を辞任したことを報道している。
- (39) 『朝日新聞』の一九一四年十二月二十九日付の記事「梁啓超辭職許可」と、前掲注(6)書、六九七〜六九九頁を参照。
- (40) 『朝日新聞』の一九一五年二月五日付の記事「梁啓超の誣言」を参照。
- (41) 『朝日新聞』の一九一五年二月五日付の記事「日支交渉問題」を参照。
- (42) 前掲注(9)書、五頁を参照。
- (43) 李喜所『重新解説梁啓超』筆談(上)、『文史哲』第三期、二〇〇四年)を参照。
- (44) 『読売新聞』の一九二〇年三月九日付の記事「梁啓超氏の山東觀」を参照。
- (45) 前掲注(6)書、八九八〜八九九頁を参照。
- (46) 『読売新聞』の一九二〇年三月十六日付の記事「山東問題悪化か 裏面に潜む三策士」、二十三日付の記事「対独通商開始か 非公式に許可せん▽直接交渉不賛成」、二十七日付の記事「交渉延びん 山東問題形勢」、一九二一年九月十五日付の記事「梁啓超直接交渉に反対 顔総長へ長文の意見書」、二十一日付の記事「梁啓超氏の山東還附事件觀」を参照。
- (47) 『読売新聞』の一九二〇三月十六日付の記事「山東問題悪化か 裏面に潜む三策士」を参照。
- (48) 『読売新聞』の一九二三年八月七日付の記事「対支文化事業芳沢公使支那側有力者招宴」を参照。
- (49) 『朝日新聞』の一九一三年九月二日付の記事「対支文化事業大體の見当 岡部長景氏談」を参照。
- (50) 梁啓超は彼自身が生涯にわたって行った政治活動や研究活動の動機について、以下のように話したことがある。「楚中元問他、『梁先生過去保皇、後來又擁護共和、前頭擁袁、以後又反對他。一般人都以為先生前後矛盾、同學生們也有懷疑、不知先生對此有何解釋。』他聽了楚中元的話以後、沈吟了一會兒、然後以帶笑的口吻說、『這些話不僅別人批評我、我也批評我自己。我自己常說、不惜以今日之我去反對昔日之我、政治上如此、學問上也是如此。但我是有中心思想和一貫主張的、決不是望風轉舵、隨風而靡的投機者。(中略)我為什麼和南海先生分開？為什麼與孫中山合作又對立？為什麼擁袁又反袁？這決不是什麼意氣之爭、或爭權奪利的問題、而是我的中心思想和一貫主

張決定的。我的中心思想是什么呢？就是愛國。我的一貫主張是什么呢？就是救國。我一生的政治活動、其出發點與歸宿點都是要貫徹我愛國救國的思想與主張、沒有什麼個人打算。（中略）總之、知我罪我、讓天下後世批評、我梁啓超就是這樣一個人而已。』とある。前掲注（33）夏曉虹編書、李任夫「回憶梁啓超先生」、三四三～三四七頁を参照。

（張淑君、広島大学大学院文学研究科博士課程後期）

# **The Portrayal of Liang Qichao in Newspapers Until the Postwar Period: An Analysis Focusing on *The Asahi Shimbun* and *The Yomiuri Shimbun***

Shujun ZHANG

**Key Words: The Portrayal of Liang Qichao, the Asahi Shimbun, the Yomiuri Shimbun**

During his 14-year exile in Japan, Liang Qichao gained prominence through a series of journalistic activities, including the establishment of publications and the publication of articles in Japanese magazines, which attracted not only the interest of Japanese intellectuals, but also the attention of the newspaper press. This paper, based on the collection and collation of relevant reports on Liang Qichao from the Asahi Shimbun and the Yomiuri Shimbun spanning from the Meiji era to the end of World War II and taking into account Liang Qichao's life experience, examines the content of these reports according to different time periods. The findings indicate that Japanese media held a favorable view of Liang Qichao's personality and talent during both his pre-exile and exile periods. However, their evaluation of his reform efforts and subsequent newspaper activities was less favorable. Despite extensive coverage of Liang Qichao's activities upon his return to China, the Japanese media's evaluation remained relatively low, likely influenced by his political stance. On the other hand, the assessments of Liang Qichao by major Japanese newspapers, particularly the Asahi Shimbun and the Yomiuri Shimbun are reflective of the general public's perception of Liang Qichao in Japan during that time.